

レッシング『エルンストとファルク』（前篇）

レッシング

『エルンストとファルク』（前篇）

井 汲 越 次 訳

レッシング

エルンストとファルク

フリー・メーソンのための対話

フェルディナント公爵閣下

公爵閣下

陳者、私儀御同様真理の源で水を掬んでいたものでございます。それがいかほど深く究め尽したか、わかってもらえるのは、もっと深く掘り下げて来るようお許し戴けるお方しかありません。——まことに渴を許えや久しく、死ぬばかりなのです。

あらあら

かしく

第三者のまえがき^二

次掲の冊子にはフリー・メーソンの本^一、論^三は入っていないというのでしたら、フリー・メーソンのことに関し数多出てくる書物の中、同会の本質^二についてもっとはっきりした概念の得られるようなものがあれば、是非御教示に与りたい。

だが、素性の如何を問わず、フリー・メーソンの各位が、本書の示された見解を以て唯一不二のものだと進んでお認めなさろうというのなら、——この見解からすれば、単なるファントムなら近眼にはわからなくても、健康な眼なら正体は直ぐわかるもののだが——それならそれで、なぜもっとはやくはっきりそう云ってくれなかったのかという疑問が出て来るかも知れない。

この疑問には色々答えられよう。だがもう一つ、次の疑問ぐらいこれとよく似た疑問はなかなかはあたるまい。その疑問とは、——キリスト教に体系的な教科書ができあがったのが^四、なぜあんなに遅かったのだろうか？ あれほど多くの立派なキリスト教徒がいたのに、なぜかれらの信仰に合理的に説明することもできず、また説明しようとしなかったのか？ ということである。

こうしたことはおそらく信仰自身にさほど得るところもなかったので、キリスト教では尚早だったからではあるまいか。もっともキリスト教徒としたら、信仰を全然不修理に説明しようなんてことは思いも設けぬことだったろうが。

こうしたことは自分から実地にあたってもらいたい。^五

第一の対話

エルンスト なに考えているんだいおい。

ファルク いいや、別になんにも。

エルンスト だって、いやに黙々としてるじゃないかね。

ファルク だって、そうじゃないかね。ものをたのしんでいるとき、誰が考えごとなんかしてるもんかね。僕はこの爽やかな朝のひとときをた

レッシング『エルンストとファルク』（前篇）

のしんでいるところなんだ。

エルンスト　ごもっともだ。そんならそのいまの質問はそのままこっちにお返しと来るか。

ファルク　何か考えごとをしてるんなら、それあその話もしようがね。友だちと大いに談ずるに如くはないからな。

エルンスト　まったくその通りだ。

ファルク　美しい朝はもう十分堪能したろうが。なにか面白いことがあったら、話さないか！ 僕には一向なんにもないんで。

エルンスト　よし来た！——あのねえ、かねがね君におうかがいしようと思ってたことがあるんだが。

ファルク　じゃ、云うがいい。

エルンスト　ねえ、本当かね、君、君がフリー・メーソンだってこと？

ファルク　そうお訊ねになるのは、君がそうじゃないからだな。

エルンスト　もちろん！——だけど、卒直に答えてくれないかね。——ほんとうにフリー・メーソンなのかね？

ファルク　まあ自分じゃそう任じているんだがね。

エルンスト　そんな返事は、自分でも自分のことがよくわかってない奴のいうことだが。

ファルク　どういたしました！　これも僕は自分のことは自分なりにわかっているつもりだが。

エルンスト　だって、いつまたどこで、誰その紹介で入会したかという位は、御承知でしょうが。

ファルク　それあ、ちやんと承知してるさ。だけどそれだけは云われないよ。

エルンスト　云われないって？

ファルク　誰がいられてくれた、誰がはいれなかったなんてことは！

エルンスト　君自身はどうなんだい。

ファルク　自分じゃフリー・メーソンを以て任じているんだ。なにも別に正式に古参のメーソンたちから入会を認められたというんじゃない。

い。というよか、抑々フリー・メーソンリーなるものがどういものなのか、その云われ因縁、故事来歴といったものをよく知ってるだけの

ことなんだよ。

エルンスト それにしちやどうもあやふやな云い方じやないかね——自分じや、そう任じているなんて！

ファルク こうした云い方にすっかり慣れちまつてるんでね。何も別段自信がないからじやなく、ただあんまり人の迷惑になるようなことはしたくはないからな。

エルンスト いやに他人行儀な返事だな。

ファルク 他人行儀というよか友人に対する礼儀じやないかね。

エルンスト でも入会はしてるんだらうが、何もかも御承知の上で——

ファルク よその人だって入会しているからには、承知の上さ。

エルンスト まさか、君だって入会したからには、知ってて、知らないとは云えないじやないかね？

ファルク それが生憎と！

エルンスト どうしてさ？

ファルク だって、いれる方だって御存知ないのがたくさんいるんだから。それあよく御存知のものも少しはいるだらうが。だが、とにかくこいつばかりはちよつと口外で、きないことになってるんでね。

エルンスト 入会もしていないくせに、どうしてそう知ったかぶりができるんかね？

ファルク かまやしないじやないかね！——フリー・メーソンリーといっても、なにも決してそう粹狂な気紛れでもなし、なにも決してその無用のものでもなく、人間と市民社会の本質に基いた必然的なものなんだよ。だからそういうことになったのも、何も人にすすめられてなつたというよか、やはり自分なりによく考えた上になつたことなんだよ。

エルンスト フリー・メーソンリーといっても何も決してそう粹狂な気紛れなものじやないっていうと？——その使ってる言葉も、符号も、

慣習も、みんな違っているかも知れないというのに、ずいぶん粹狂な気紛れなものじやないかね？

ファルク それあそうだ。だけどそうした言葉とか、そうした符号とか、そうした慣習とかいうものがそのままフリー・メーソンなんじやな

いんだからな。

エルンスト　フリー・メーソンといっても、何も決してそう無用の長物じゃないっていうと？　——それじゃまたフリー・メーソンなんてものがなかったときに、どうしてまた一人人間がそんなものをつくったんかね？

ファルク　フリー・メーソンはいつの世にもあったものなんだよ。

エルンスト　じゃ、その必然的な、その無用の長物じゃないフリー・メーソンとは一体どんなものなのかね？

ファルク　さっきも説明したように——そんなことは先刻御承知の連中でも、なかなかそう口外できないものなんだ。

エルンスト　だからインチキだっていうんだ。

ファルク　まあ、そうあわてなさんな。

エルンスト　概念さえあれあ、言葉にも云いあらわせそうなものだが。

ファルク　そうとばかりは云えないよ。それに僕とそっくりそのままの概念を言葉を通じてよその人が得るなんてことは、少くとも無理だよ。

エルンスト　そっくりそのままじゃなくても、ほぼそっくりだった概念なら。

ファルク　ほぼそうだった概念なんて、この場合役にも立たず、むしろ危険な位だよ。およそ不十分なものは役にも立たないからな。しかもくだらないことが多すぎると危険だよ。

エルンスト　おかしい！　じゃ、会の秘密を知っているフリー・メーソンすら、そう一々言葉通り伝えられないということになると、どうして自分たちの会をひろめるんかね？

ファルク　事業によってさ。——親しく交際する価値ある善良な大人や青年たちに会の事業を想像させるなり、あてて見させるんだ。——これらに成るだけ眼に見えるようしてやるのだよ。そうすれば、そこに趣味を見出し、似たような事業をするようになる。

エルンスト　事業って？　フリー・メーソンの事業っていうと？　——実はかれらの講演や歌曲しか知らないんだけど、それあこうして活字になつたものの方が大抵考えたりしゃべったりしているよかきれいなさね。

ファルク　そいつはかれらの講演や歌曲に共通したことだな。

エルンスト　それとも、これらの講演や歌曲の中で自慢していることをかれらの事業と考えるとおっしゃるのかね？

ファルク　自慢していることばかりじゃないが。

エルンスト　ところが一体どんなことを自慢しているか？　——およそ善良な人間、誠実な市民にはみんな期待される事にすぎない。——かれらときたら実に友情に篤い、実に従順な、実に愛国心に富んだ連中なんだ！

ファルク　別になんでもないことじゃないかね？

エルンスト　なんでもない！　——別にそれだからって、その他の連中と変わったところはないがね。——誰だってそうあるべきじゃないかね？
ファルク　そうあるべきだよ！

エルンスト　それしきのことなら、フリー・メーソンはいらなくても、誰だってそういう動機なり機会はいくらもあるんじゃないかね？

ファルク　だけど、会にはいり、会を通じて、動機がひとつ多くなるわけさ。

エルンスト　動機の多少なんか、問題じゃない！それよか、ただひとつの動機に懸命になることだ！　——そんな動機の多少なんてことは、機械の歯車みたいなものさね。歯車が多ければ多いだけ、かえって壊れやすいものさね。

ファルク　それに異存はないよ。

エルンスト　じゃ、どんな動機がふえるんかね！　外の動機はみんななく、そ味、憎にけなしたり、難癖をつけて！　それでいて御自分ばかり唯我独尊なんだからなあ！

ファルク　まあま、お手柔かに！　——あんな空っぽのお説教や讚美歌の大法羅吹きの阿呆陀羅！　出来損いのがらくた細工なんか！

エルンスト　つまり——講師先生はおしやべりということなんでしょう。

ファルク　つまり——講師先生がフリー・メーソンのことをどんなに褒めちぎろうと、そんなことは何もその会の事業なんていう程のものじゃないと、云おうとしただけのことなのさ。講師先生だって少くとも単なるチンドン屋じゃないんだし。それに会の事業それ自身が雄弁に語っているものだから。

エルンスト うん、それで君の云わんとすることがわかった。それにしてもこの事業、この雄弁な事業なるものが、どうしてすぐ思いつかなかったのか知ら。雄弁どころか、絶叫的などでもいい位さ。フリー・メーンソンの会員が互いに相扶ける、極力相扶けるという位じゃあ、足りない。それ位のことなら、どこの団体にも当然あって然るべき性質なんだから。かれらとて国家の一員であるからには、どうしてその国その国の全国民大衆ために尽さないものかね？

ファルク 例えば？ —— そうしたら、君の云うことが当たっているかどうか、よくわかるんだが。

エルンスト 例えば——ストックホルムのフリー・メーンソンだ！立派な養育院^五をたてたじゃないか？

ファルク ストックホルムのフリー・メーンソンなら、別な機会だが、実際なかなか活動してたよ。

エルンスト 他のどんな機会だったけ？

ファルク その他、機会は違うが。

エルンスト それからドレーステンのフリー・メーンソン^六だっただ。貧乏な女の子に仕事を与え、レースを作らせたり、縫物をさせたり——さすがの養育院もために狭しといた始末だった。

ファルク 冗談じゃない、エルンスト！^七 話も休み休みしないと、耳が痛いぜ。

エルンスト じゃ、冗談は抜きにして——それにブラウンシュワイクのフリー・メーンソン^八がある！ 貧乏な画才のある男の子たちに絵を教えているよ。

ファルク いいじゃないかね。

エルンスト それからベルリンのフリー・メーンソンと。こいつはバーゼド―博愛学院^九を後援してる。

ファルク ええ何だった？ ——フリー・メーンソンが？ ——あの博愛学院を？ 後援してるって？ そんなこと誰から聞きいて来た？

エルンスト 新聞が吹聴したんだ。

ファルク 新聞が？ ——そんならバーゼド―がサインした受取りを見せてもらわなくちあ。そんならきつとその受取りはベルリンの一フリー

ー・メーンソンに宛てたものじゃなく、フリー・メーンソン一同に宛てたものだったに違いないがな。

エルンスト それはどういうことなんかね？ ——じゃ、君はバーゼドー学院を認めないかね？

ファルク 僕がかい？ とんでもない！ 何処に僕以上あれを認めているものがあるかね？

エルンスト じゃ、この後援を快く思っていないってわけじゃないんだね？

ファルク 快く思っていないって？ 何処に僕以上あのために全力を尽しているものがあるかね？

エルンスト そうなると！ ——いよいよ以て君という人物がわからなくなって来たぞ。

ファルク それやそうだろうな。こいつは僕がわるかった。——というのは、フリー・メーソンだって、フリー・メーソンとしてはやれないようなことを仕出すかもしれないからな。

エルンスト だがそれはかれらの他のすべての善業^二にあてはまるといふことかね？

ファルク 多分ねえ！——多分、君がいまあげた善業^二というのは、簡結に、スコラ的表現でいうと、かれらのアド・エクストラ^二の事業^二にすぎないだろうからな。

エルンスト それはまたどういふことかね？

ファルク ただひとの注目をひくようなかれらの事業にすぎない。人の注目をひかんがため、ただそのためにのみやっている事業にすぎないってことさ。

エルンスト 注目と寛容という一挙兩得のためにか？

ファルク そうかも知れんな。

エルンスト だけど、それじゃかれらの本当の仕事は？ ——おい、何とか云えよな。

ファルク ちゃんと答えたじゃないかね？ ——かれらの本当の事業はかれらの秘密なのだからな。

エルンスト は、はアー ——それじゃやっぱり言葉じゃ説明できないって奴かね？

ファルク まあ、そうさ！ ——ただこれだけは僕だって云えるし、また云ってもいい。——フリー・メーソンの本当の仕事となると、とても大きな、とても遠大なようなんで、おそらく何百年かたたなけあ、これがかれらのやったことだ！ なんて、なかなかそうはっきり云えた

ものではない。けどまた現にまだこの世に在するところの善はすべてこれかれらのやったことなんだ。——いいかね、——現在この世にあり、かつまた将来この世に生ずべきあらゆる善に協力し続けて行く——いいかね、どこまでもこの世のことなんだから。

エルンスト よせやい！ そうお茶らかすんじゃない。

ファルク そんなことあるもんか——おや！ 蝶々が飛んで来たぞ。今度は逃がすものか。カタトウダイ虫の蝶だぞ。——じゃ、早い話が、フリー・メーソンの本当の事業のねらいは、世間で普通一般に善業といっていることを大部分すべて無用のものとするものなんだ。

エルンスト それでも善業というものかね？

ファルク これ以上結構なことはあるまい。このことはちよつと考えてくれないか。じきまた君のところにやって来るから。

エルンスト 善業なんてものを無用のものとする善業というの？——こいつは謎々みたいな話だ。だけど謎々なんか考えるのもいやだ。——木陰で寝ころんで蝶々でも見てた方がましだて。

第二の対話

エルンスト おや？ どこへ行ってたんかね？ 蝶々は捕まらなかったのか？

ファルク 川沿いまで、草むらから草むらへと追っかけて行ったところ。——たちまちまたこっちさ。

エルンスト う、うん。そういつた誘いの手があるからな！

ファルク どうだね、よく考えて来たかい？

エルンスト 何をさ？ ああ、君の謎々のことかね？ 捕まらなかったよ。きれいな蝶々の方も！ だから、これ以上、苦勞させるなよ。——

フリー・メーソンの話もあれつきりさ。でもまあよくわかったよ、君もみんなと同じだってことが。

ファルク みんなと同じだって？ みんなはそう云ってはいないがな。

エルンスト そうかね？ それじゃフリー・メーソンの中にもやっぱり異端はいるのか？ そしてさし詰め、君がその一人ってわけか。——だけど、異端にはすべて正統派と何処かいつも共通なところがあるもんだ。そしてそのことを話してたんだ。

ファルク そのことって、どのことさ？

エルンスト フリー・メーソンの正統派とか異端のことさ——あいつらはみんな言葉を弄んでいるばかりで、質問されてもろくに答えはしないんだ。

ファルク そう思うか？ ——よし、じゃ何か外の話をしよう！ だって、折角いい気持で思索にふけていたところをすっかりかき廻されちまったんで——

エルンスト もう一度またあの状態にかえる位、いともお易いことだ。——さあさ、この脇に腰をおろして、ほうら、見給え！

ファルク なにさ！

エルンスト 蟻の群が上下左右ごったがえしに働いているだろうが！ 何という忙しなさ、しかもまた何という秩序！ みんなして担いだり、引きずったり、押しあいへしあいしてるが、どいつもこいつも一匹だって他人の邪魔なんかする奴はいない。ほうら！ それどころかお互いに実に仲よく助けあっている。

ファルク 蟻^二って奴は、蜂みたいに社会生活を営んでいるんだ。

エルンスト しかもそれが蜂なんかよりもっと驚くべき社会生活なんだ。お互いの間に、かれらを統^すべ、従えている奴なんかひとりもないんだから。

ファルク 秩序というものは——だから政府なんかなくてもきつと存立し得るものなんだよ。

エルンスト 各自が銘々、自分自身を統御することを心得てくれあね。それやそうさね。

ファルク 人間^三だって、いつかはそうなるんじゃないかね？

エルンスト さあ、なかなかむつかしいだろうな！

ファルク 情けないもんだなあ！

エルンスト まったくねえ。

ファルク ささ、そろそろ引上げようじゃないか！ だって、いまにまた蟻の奴が身体に匍い上って来るぜ！ それに、そうぞ、是非この機

レッシング『エルンストとファルク』（前篇）

会に君にききたいことがあるんだが——あのことに對する君の考えがどうもまだ一向わからないんで。

エルンスト　どのことさ？

ファルク　人間の市民社会一般のことなんだが——君はどう思ってる？

エルンスト　大いにいいものと思ってるよ。

ワルク　違うない。——だけど君はこれを目的と考えているのか、それとも手段と考えているのか？

エルンスト　どうもそういうことになるをよくわからないな。

ファルク　じゃ、人間というものは国家のためにつくられたものか、それとも国家というものは人間のために存在するものと思うかね？

エルンスト　それあ、前説を主張するものは、どうしても少いだろう。やはり後説の方が穩当だよ。

ファルク　僕もそう思う。——国家は人間を結合して、この結合を通じ、またこの結合の中で人間各自それぞれ自分の幸福により多く、より

確實に与られるようにしているのだ。——国家の一員たる一人一人の幸福の総てこそ即ち国家の幸福ということになる。之を外にして国家の幸福なんてものはありやしない。その外に国家の幸福とか何とか云っても、国家の一員として少数の者はまだ困っている、いや、困らざるを得ないのであって、みんな実は専制政治の粉飾五に外ならないんだ。

エルンスト　そんなこと、そう大きな声で云ってくれるな。

ファルク　かまわないじゃないかね。

エルンスト　各自それぞれ自分の事情から判断する真理ということになると、どうも濫用され易いんでな。

ファルク　これはしたり、君、それでもう半ばフリー・メーソンだぜ。

エルンスト　僕が？

ファルク　君がさ。そうじゃないか、ちゃんとその真理なるものがわかっているじゃないかね。こいつは黙ってた方がいいものなのだ。

エルンスト　口外いたしかねないことだて。

ファルク　賢者は黙ってた方がいいことは口外しないことになっているのだ。

エルンスト 何とでも御随意に！——フリー・メーソンの話の蒸し返しはよそうや。僕だってもう君の御談議は御免だよ。

ファルク 失敬——つい話に乗り気になってしまつて。

エルンスト なにおかしい！——ええと、人間の市民生活、あらゆる憲法なんて、人間の幸福のための手段に外ならないと。それからその先は？

ファルク 手段に外ならない！しかもその手段たるや、人間の発明に成るものなのだ。もっとも、自然が一切お膳立してくれたらこそ、人間の方でもおいそれと発明に及んだに違いないんで、このことはあながち否定しようっていうわけじゃないんだがね。

エルンスト さればこそ、社会というものを自然の目的と考えるようになった者が少数ながらいるんだな。すべて、われわれの情熱もわれわれの欲望も、すべて帰するところはそうなんだから——従つて自然こそ自然の帰する最後のものだ、こう結論を下したのだ。自然は何もそんな手段なんか合目的につくりあげなくたっていいようなものなんだ。自然は現実の個々の人間の幸福なんかよりは——国家とか祖国というような——抽象的概念をもつた幸福の方を余計に意図して来たみたいなんだな。

ファルク 大いに結構！ そう来てくれなくちあ。どうだね、そうじゃないかね。憲法なるものが手段であり、人間の発明に成る手段であるからには、それが人間の手段なるものの運命の例外をなすわけがないじゃないかね？

エルンスト その人間の手段なるものの運命とは何を指すのかね？

ファルク そいつは、人間の手段なるものとは切つても切れないものなのさ。かと云つて、およそ神的な、謬ちのない手段なんかとは別箇のものだが。

エルンスト なんだね、そいつは？

ファルク 必ずしも謬りなきにしもあらずってことさ。往々事志と違つばかりか、反対の結果になることさえあるっていうからな。

エルンスト 例えは、どんなことかね。

ファルク 例えは、航海とか舟というのは、遠く離れた陸地に行く手段だ。ところがそれがまたおそらく二度と帰つて来ない原因にもなるからな。

ファルク　そうになると、人間はやはりドイツ人とかフランス人とか、ロシア人とかスウェーデン人とか何とか、そういったことになるんだね。
エルンスト　きつとそうだよ！

ファルク　じゃ、それですでにひとつできたじゃないか。そうじゃないかね？　ねえ、そうだろうか？　これらの比較的小さな国々にそれぞれ独自の利害関係が生じ、それからそれらの国々の成員にもまたそれぞれ独自の利害関係が生じて来るんじゃないかね？
エルンスト　それしかないがな？

ファルク　こう利害が違つと、今日のように、往々紛糾を来すことになるし。それに双方とも違った国家の成員だと、今日ドイツ人がフランス人に対し、フランス人がイギリス人に対するのと同じように、なかなかお互いに感情に捉われずに相対するということはないからなあ。

エルンスト　それあ、そうだろうな。

ファルク　ということは――今日ドイツ人がフランス人に、フランス人がイギリス人に対する場合、或はその逆の場合、それぞれお互いの性格が同じようなことからひきつけられた裸一貫の人間対人間が相対しているのじゃなく、むしろお互いにそれぞれ傾向が違つていて、意識しているの、一人一人お互いに少しでも世話を焼いたり、お互いに喜びや悲しみをわかちあわないうちは、お互い同志冷たく、控え目で、信用しないといった、そうした人間同志がお互いに相対することになる。

エルンスト　残念ながら事実その通りだ。

ファルク　そうになると、在来こうした結合を通して人間に幸福を確保せんがために人間を結合した手段が、同時に人間を分裂させるということもまた事実だよ。

エルンスト　君がそう理解されるなら。

ファルク　もう一歩話を進よう。比較的小さな国家は多くは気候も全く違つし、従つてまた需要供給も全く違い、従つてまた風俗習慣も全く違い、従つてまた道義道徳も全く違い、従つてまた宗教も全く違つということになる。そう思わないかね？

エルンスト　こいつはえらいことになったぞ！

ファルク　そうだとすも、人間はユダヤ人^六とかクリスチャンとかトルコ人ということになるだろう。

レッシング『エルンストとファルク』（前篇）

レッシング『エルンストとファルク』（前篇）

エルンスト あえて否とは云わないがね。

ファルク そうなるとだ。いや、そうなったところで、人間はお互い同志何と呼ぼうと、わがクリスチャンなりユダヤ人なりトルコ人なり、昔からの関係とちっとも変らないだろう。裸一貫の人間対人間ではなく、お互いに或る種の精神的優劣を相争い、かつまたそこに自然人なんかにはとても思いもよらぬ権利を主張する、そういった人間対人間ということなる。

エルンスト 大いにかなしことだが、残念ながら大いにありそうなことだ。

ファルク ありそうというだけかね？

エルンスト だって、いま君が云ったように、すべての国が一色の憲法となり、宗教までもすべて一色となるなんて、さあ、どんなものかね。実際、宗教が一色でないのに憲法が一色だなんて、理解できないがな。

ファルク 僕だってそうさ。——ただ、君の逃げ道を封じに、ああ云ってみただき。あちらを立てれば、こちらは立たずでね。一つの国家があれば、諸々の国家あり。諸々の国家あれば、諸々の憲法あり。諸々の憲法あれば、諸々の宗教ありさ。

エルンスト う、うん。そんなみたいだな。

ファルク そうなんだよ。——ところで次は市民社会が、まったく本意にひきおこしている第二の悪なんだが、どうだね？ 市民社会は人間同士分割せずしては、人間を結合できない。しかも人間同士の間には障壁を築かなければ、分割はできないんだ。

エルンスト そしてこの間隙こそ怖い！ この障壁ときたら、とても乗越えられるものじゃないぜ！

ファルク さらに第三の悪があるんだよ。——市民社会は人間を種々様々の民族と宗教に分離し、分割するだけじゃない。部分部分それぞれそれ自身一体をなすよう、そうした少数の大きな部分に分割した方が全然一体をなしていないよか、ずっとましだろうからな。——いや、実は市民社会はこれらの部分にもそれぞれこの分割を云わば無条件に続けて行くのだ。

エルンスト どうやって？

ファルク それとも、身分の差別のない国家なんてものが考えられるのかね？ 国家たるからにはよかれ悪かれ、完璧に近かれ遠かれ！とにかく国家の成員がお互いにみんな同じ関係だなんて、到底あり得べからざることだぜ。——同じくみんな立法に関与できるとしても、みな

みな同等に関与できるなんて、ありっこない。少くとも同等に直接関与するなんて、尚更だよ。比較的少数の貴族の成員というものがこういふふうにして生れて来るのだ。——かりに、はじめ国有物が全部かれらの間に均等に配分されたとしても、その均等の配分はどうしてなかなか二代と続きっこない。或者は他の者より自分の財産のつかい方が上手になるだろうし。それにまた甲は乙より自分の財産を下手につかって、たくさんの子孫に分配しなければならぬようになる。こうして成員に貧富の差ができることになる。

エルンスト あたり前さ。

ファルク まあ、考えてみたまえ、およそこの世の中で、こうした身分の差に原因をもたない悪が一体どれほどあるかね。

エルンスト かなわないなあ！ 僕だって何も君に反対する理由があるわけじゃないんだがね。——ようし来た、人間は分割によってのみ結合されるものなり！ 不断の分割によってのみ結合状態を維持されるものなり！ と、一応そういうことにしとくよ。仕方がないやね。

ファルク だから云ってるんだ。

エルンスト それやまたどういふことかね？ そうやって僕に市民生活というものに愛憎をつかさよっていうんか？ 国家に結合されようなんて思想が人間にゆめ起らないようにさせてやろうというんか？

ファルク それあひどい！ ——市民社会のせめてもの美点として、人間の理性の樹立されるのはこの社会しかないということだとしたら、ずっと大きな悪があっても僕はやはりこの市民社会を有難く思うがね。

エルンスト 諺にも、火がつかいたけれや、煙は我慢しろていうからな。

ファルク その通り！ だけど、火には煙が避けられないからといって、煙突を發明しちやいけないうことはないだろう！ そして煙突を發明した者は、だからといって火の敵かたきということになるかね？ ——わかったね、僕の云わんとすることが何処にあるか？

エルンスト 何処って？ どうもよくわからないが。

ファルク さっきの譬えは実によく当たっていたがな。——人間が国家に結合されるのは、その分裂によるよか外に仕方がないとしても、そうだからってそれでいいということになるかね、その分割が？

エルンスト まさかあ。

レッシング『エルンストとファルク』（前篇）

ファルク　そうだからって、それが神聖ということになるかね、その分割が？

エルンスト　何処が神聖なのさ？

ファルク　そうだからってまたこれに手を加えてはいかんということになるかね？

エルンスト　どういうつもりなのか……？

ファルク　必要以上にその分割を大きくしまいたいとしてのことさ。結果をできるだけ無害なようにしてのことさ。

エルンスト　どうして禁じられてるんかな？

ファルク　でも命じられてるわけでもあるまい。まさか民法に命じられてることもあるまいって！——民法はその国の国境外には及ばない

んだから。ところがそれがありとあらゆる国家の国境外にまで及ぶことになるんだから。従ってこれは *Opus superogatum* (訳者注—責任外の事業) ではない。それで各国の最も賢明にして最も優秀な人間が自ら進んでこの *Opus superogatum* に参ずるのは、望ましいというだけの話だろうな。

エルンスト　望ましいというだけの話——いや、それこそまったく願ってもない話だ。

ファルク　だろうな！。各自民族性の偏見を超越して、愛国心といってもどこいらまで進むと美德でなくなるのか、その辺のことがよくわか

った人物が各国に出て来れあ、まったく願ってもないんだがなあ！

エルンスト　まったく願ってもない！

ファルク　だがなあ！各自伝来の宗教のもつ偏見にとらわれず、各自が善とし、真として認めたことはすべて善であり真でなければならぬと考えるような人物が各国に出て来れあ、まったく願ってもないんだが。

エルンスト　まったく願ってもない！

ファルク　各自市民的な高位高職に眩惑されず、また市民的な卑少下賤も不快としないような人物が各自に出て来れあ、まったく願ってもない話だがなあ。かれらの社会なら偉い人こそ腰が低く、卑しい人でも胸をはっていられるんだが。

エルンスト　まったく願ってもない！

ファルク　ところで、この願いがほんとうに叶ったら？

エルンスト　ほんとうに叶ったら？　——そうなれあむろんあちこちからそういった人物がぼつぼつ出て来るな。

ファルク　あちこちとか、ぼつぼつとかいふどころじゃない。

エルンスト　或る時代、或る国ということになれば、相当なものになるぜ。

ファルク　現にそういう人物が方々にいるとなると、どうなる？　また更にあらゆる時代に亘っているに違いないとなると？

エルンスト　そうなってくれあな！

ファルク　ところでこれらの人物が徒らに散り散りばらばらになっていなかったら？　必ずしもこの見えざる教会ハに限らずというようなこと
たら？

エルンスト　美しい夢さ！

ファルク　要するに——これらの人物がみんなフリー・メーソンだったら？

エルンスト　なんだと？

ファルク　人間同志の間をこうわけ隔てしているあの差別を、もと通りできるだけ緊密に結合させることを以て、共々に自分たちの仕事とするものがフリー・メーソンだとしたら、どうだね？

エルンスト　フリー・メーソンだって？

ファルク　いま云った通り、共々に自分たちの仕事として。

エルンスト　フリー・メーソンが？

ファルク　やあ、失敬！　——そうそ、また忘れちゃった。フリー・メーソンの話なんかちっとも聞きたかないんだっけ。——丁度朝食にお
呼びだ。さあ、行こう！

エルンスト　まあま！　——もうちよっと！　——いま、フリー・メーソンって云われたが——

ファルク　ついまた話がそこに舞い戻って、失敬！　——さあ、あそこはもっと多勢集っているから、また面白い話があるぜ、さあ！

第三の対話

エルンスト 一日中、人混みの中を逃げ廻られちあ。寝室の中まで追っかけて行くぜ。

ファルク 何か大事な話でもあるのかね？ただの無駄話なら、今日は退儀だ。

エルンスト ああ云って人の好奇心をなぶっているんだから。

ファルク 君の好奇心で？

エルンスト 今朝のあの煽またて方どったら、道どに入ったもんだ。

ファルク 今朝どんな話をしたっけ？

エルンスト フリー・メーソンの話さ。

ファルク おやあ？——ヒュ尔蒙ト鉱泉一にいい気持になって、うっかり秘密をもらってしまったかな？

エルンスト なかなか、仰せの通り、こいつばかりはもらせたものじゃないよ。

ファルク 勿論さ。——おかげで安心したよ。

エルンスト だけど、フリー・メーソンについて思いもかけぬ話をきかせてもらったよ。おどろいたね。考えさせられたな。

ファルク だが何のことだったけ？

エルンスト いやはや、そう苛めなさんな！——ちやんとよく臆おぼえているくせに。

ファルク そうそ。段々思い出して来た。——ところで、一日中善男善女のとこに顔を見せなかったのも、そのせいかな？

エルンスト そうだったんだよ！——でも少くともひとつ質問に答えてくれなけれや、眠れないことがあるんだ。

ファルク それで御質問に及ぶというんか。

エルンスト でもフリー・メーソンの趣旨が事実ああった大きな立派なものだということが、どこから証明できるのか、少くともなる程と思

わせることができるのかね？

ファルク そんな趣旨の話なんかしたっけ？ そうだっけなあ。——何しろ、君にはフリー・メーソンの本当の事業というものの概念なんて、まるっきりないんだからな。ただ一点、注意したい点があっただけなんだ。わが国の賢明な政治家なんかの夢想だにしないようなことが、まだまだたくさん生れて来る。フリー・メーソンの人たちが駆けずりまわっているのも多分そのためだ！ 多分、そのためなんだよ。——建築用の敷地はもうちゃんと見つかり、縄張りもでき、用意万端整っているように君の偏見をなおしたいばかりさ。

エルンスト 何とでもおっしゃい。——よし、君の話だと、フリー・メーソンとは国家というものの避くべからざる悪に自ら進んで対抗せんと買って出た連中だということになると思うが。

ファルク そういう考えなら、少くともフリー・メーソンに何にも迷惑はかからない。——それでやってくれ！——そいつをしっかり離さないことだ！——余計なことは、ひとつも入れるんじゃないぜ。——国家というものの避け難い悪！ それは何も甲なり乙なりの国家のもでもない。またひと度或る種の憲法を採択したからには、その結果として採択した憲法から必然的に生ずる避け難い悪をさすでもない。そんなものにフリー・メーソンはかまけてない。少くともフリー・メーソンたる以上は。そんなものに対する対症療法なんか、市民に委せておくのだ。市民がちゃんと自分の意見なり、気持に従い、自分の危険で処理することなのだから。全然種類の違った、全然高級な種類の悪がフリー・メーソンの事業の対象なのだ。

エルンスト よくわかった。——そいつは何も不平不満の市民をつくり出す悪じゃなくて、いかに幸福な市民だって免れない悪なんだな。

ファルク その通り！——これに対して——さっき、君、なんて云ったっけ？——対抗する？

エルンスト うん！

ファルク その言葉は少々意味が広いな。——対抗して！——それらの悪を完全に刈取ってしまう？——そうは行かんよ。そうになると、国家自身まで同時に一緒くたにつぶしてしまうことになるからな。そんなことに何の感情ももってない奴らを一遍にわからせようとかかかっても仕方がない。まあ、遠くの方から人間の心にそういう感情を起させて、うまく芽がふくようにしてやるとか、その植物を植えかえるとか、除草するとか、葉をつむ位二が関の山だね。——それをいま対抗すると云うんなら云うがいいが。——いくらフリー・メーソンがよくやったところで、「これがかれらの仕事だ」とも云われず、何世紀もたってしまうが落ちだと、僕の云ったわけがわかったらう？

エルンスト おかげで謎々の第二もわかった——善業なんてものを無用の長物と化してしまう善業というもののも。

ファルク ようし！——さあさ、帰って、その悪なるものを研究し、知りつくし、それらの相互間の影響をよく調べあげて来給え、そうしたらその研究からして、暗澹たる時代に摂理と徳に対する極めて痛烈な、極めて厄介な反駁みたいな問題の鍵の開かれること確かだよ。こうした解決、こうした悟りを得てこそ安心も行き、幸福にもなれるのさ——別ににもフリー・メーソンと名乗らずと。

エルンスト その名乗る、ってことにいやに力を入れるんで。

ファルク 何もそう名乗らずとも、なんとかなるのに。

エルンスト こいつは有難い！よくわかった！——だがまたさっきの質問の蒸し返しになるんで、今度は少々云い方を変えざるまい。

というの、フリー・メーソンのお気に召さない悪のことなら、先刻御承知だから——

ファルク 先刻御承知だと？

エルンスト そっちから云い出したことじかないか。

ファルク ために、一つ二つ挙げてみたまでのことなのだよ。ただ一、二、極く近眼の者にもわかるようなことをさ。ただ一、二、極くわかり切った、わかり易い、広汎なことをさ。だけど別にそうわかり易いことでも、わかり切ったことでもなく、またそう広汎なことでもなく、でも、確実で、必然的な点じゃ勝るとも劣らない奴がまだまだいくらでもあるんじゃないか？

エルンスト じゃ、僕の質問も君が挙げた事柄に限ろうじゃないか。——せめてそれらの事柄についてでもいいから、フリー・メーソンの實際意図しているところはこうだと、証明してくれないかね？——どうしたんだ、黙っちゃまって？——いやに考え込んだじやないか？

ファルク なあに、こんな質問に答えなければならんことでもあるまいって！——だが、いまさらなせそんな質問をされるのか、どういう理由があるのかときかれても、わからないよ。

エルンスト それじゃ、質問の理由を話せば、僕の質問に答えてくれるか？

ファルク それは約束するよ。

エルンスト 君の敏感なことはよく知ってるが、それがこわいんだ。

ファルク 僕の敏感なことだって？

エルンスト 事実の代りに思弁を売りつけられやしないかと、それがこわいんだ。

ファルク 恐れ入ったな！

エルンスト 気に障ったかね？

ファルク むしろこちらから御礼を云わなくなるとこだ。敏感とおっしゃるか、他に何か言い方がありそうなものにな。

エルンスト なかなかどうして！ いやさ、敏感な人ほど却って矚かされ易いものなんだよ。他の連中がてんで考えもしないような計画や企画を安々と人にくれてやったり、貸してやったりするんだから。

ファルク だがどこをたたいて、連中の計画や企画がわかるかね。とりも直さずかれらの一つ一つの行事からじやないか？

エルンスト それしかあるものか？ ——ところでまたまたさっきの質問の蒸し返しになるが——人間の世界にいくつかの国家があるからには、どうしてもここに起らざるを得ない、あのさっき云われた分割を、何とかまたお互いの手で結合し直すのが同時に目的だなんて、フリー・メーソンの一つ一つの行事のどこをたたいてそんなことが云えるのかね？

ファルク もっともこいつは甲なり乙なりの国家の不利益にならないければの話だが。

エルンスト それならますます結構！ でもそれ位のことを云うんなら、なにもそんな行事なんかじゃなくてもよかりそうなものじゃないか。もっともそんなことが云われたり何かするのは、やはり一種独特特別なことに限るがな。——君の論法で行くと、どうしてもそうなりはしまいか、——君の体系が仮説にすぎないとしてのことだが。

ファルク まだ信用しないな。——だけど、フリー・メーソンの規約が君の胸にこたえるようになれば、そんなことも消えてなくなるんだがなあ。

エルンスト してどんな規約なのか？

ファルク 秘密というものを設けなかったのもそれがためだし、始終万人環座の前でやって来たのもそれによるのだ。

エルンスト ということは？

ファルク　　ということは、歴とした、立派な人物なら、祖国の別、宗教の別、市民的身分の別なく、かれらの教団の会員になれることになっているんだ。

エルンスト　　本当かね？

ファルク　　もちろん、こうした差別なんか超越した御当人たちの規約だもの、ありあわせの趣意書なんかよか、それをつくって行くということの方がその前提になってるみたいだ。もっともニトリウム^三って奴は、硝石として壁に塗込まれる前からちやんと空気中に存在しているものに違いない。

エルンスト　　それあそうさ！

ファルク　　それなのに、なぜまた当地じや何故フリー・メーソンに世間一般の策略をつかちやいかんというのか。内緒の目的の一部をちよつとばかりうちあけて、相手の邪推をはぐかしてしまうのは、世間一般の策略だ。眼で見るとは違ったことを想像するのが、邪推って奴なんだから。

エルンスト　　いいじゃないかね。

ファルク　　銀がつくれる錬金術の先生に、銀がつくれるからって邪推されないように、古銀は扱っちゃいかんと、どうして云えるかね？

エルンスト　　いいじゃないかね。

ファルク　　エルンスト！——本気できいてるのかい？——夢の中で答えてるようだぜ。

エルンスト

ファルク　　よそう、眠むたそうだ。僕も眠い。

エルンスト　　いや、君、眠かない！　けどもうたくさんだ。今夜はもうたくさんだ。明日、朝早く町に帰る。

ファルク　　もう？　何だって、またそう早く？

エルンスト　　知ってるくせに。湯治はまだ当分かかるのか？

ファルク　　一昨日はじめたばかりなんだもの。

エルンスト そんなら、湯治の終らないうちにまたお眼にかかろう。——さよなら！ お休み！
ファルク お休み！ さよなら！

お知らせ

すでに灯りはついていていた。エルンストは出て行った。そしてフリー・メーソンになった。そこで先ず眼にふれたことが、第四、第五の対話の材料だが、それが——この話の岐れ目となっている。

訳者注

一、フェルディナント公爵 (Ferdinand, Herzog von Braunschweig und Lüneburg, 1721~92) ——この時代普通フェルディナント公と云えば、同公アルブレヒト二世の嗣、カール・ウィルヘルム・フェルディナントを指し、レッシングの場合も公けの交渉は殆どカールとのことになるが、レッシングがここで『エルンストとファルク』を献呈しているのは、アルブレヒト二世の四男で、当主カールの叔父に当る。父アルブレヒト二世は三十年戦争中新教方の総帥スウェーデンのプリンツ・フォン・オイゲンの幕下に参じ、トルコの大军を敗って大功あり、所謂「地下カルヴァニスト」としてカトリックのフランスのブルボン家に抵抗した。その意味では一方同じくカルヴァン派のブルジョアジー支持をたのむブランテンブルク(プロイセン)のホーエンツォルレルン家とは互に歎を通じ、長女をフリードリヒ二世に嫁した位である。このフェルディナントも七年戦争の武勲によって公爵の称号を許されるが、フリードリヒ二世の独断専制に嫌らず、従ってフリードリヒに追従する当主カールとの間も面白くなく、フーベルトゥスの和議の後、兵役を退き、一七六六年後は全く公的生活を棄てて、フェッヘルデ Fechelde

レッシング『エルンストとファルク』(前篇)

の別荘に悠々自適の生活をおくった。同家がいわゆるウエルフェン系の由緒ある貴族だったところから同系の好みでイギリス王室側に見込まれ、イギリスのアメリカ干渉戦争の司令官の大任を囑望されたが、断呼之を拒絶している。好んで学者芸術家と交り、学問芸術の保護者、いわゆる *Mäzenfürst* を以て自ら任じた。もっとも実際に彼がフリー・メーンソンに入ったのは、例の錬金術に対する興味からだというのが、二人とも熱心なフリー・メーンソンだったという以外に、進歩的知識階級に対する思想対策としてフリード、リヒ二世との間に何らかの默契があったのではないかと考えらる。

レッシングが本書を彼に献じたのは、同公が「北歐ロジ」の総裁で（一七七二年いわゆる「第七州のロジ」総駢の総裁 *Großmeister* 兼 *Magnus Superior Ordinarius* となっている。因みに第七州というのは、聖堂騎士団がドイツを州にわけた昔の管区制を復活したものである）、厳律派の総元締だからでもあるが、作者レッシングとしたら儀礼上こうした体裁をとることによって発表の合法性を得るとともに——メーリングの云うように——フリー・メーンソン側（殊に厳律派の急先鋒だったボーデ等）の反撃を和げ得ると考えたからでもある。

第三者——第三者とあるからには、著者レッシング以外第三者なるものがあって、レッシングのこの対話を発表した形になっている。レッシングの筆に成るものと解して解されないこともないが、草案覚書や後篇のまえがきなどから推して、レッシングの外にやはり第三者なるものを設定しておいた方が安全のようである。ここに訳出した初めの三篇も、匿名で一七七八年のミカエリス大市当時、「ウォルフエンビュッテール一七七八年」という日付で発表されたので（このことは同市の出版目録に出ている）、有名なゲッチングンの文献学者ハイネ *Chr. Gottlob Heyne* が検閲官として目を通し、当局の出版允許を得ているが、『アンチ・ゲツツェ』が第十一を最後に、福音教会並びにプロシヤ当局の圧力で執筆停止となっていたので、本書の上梓にはレッシングも少からず神経をつかわざるを得なかったわけである。後篇にも同じく「第三者のまえがき」があるが、後篇の方はフェルディナント公も公表を好まなかったことがはっきりしていたし、レッシング自身当主カール宛ての書翰で、予め同公に知らさずに公表しないことを約している手前もあり、それをしも押して強いて発表しようというからは、どうしてもこうした形式をとらざるを得なかったのではあるまいか。ここいらは本書の機微でもある。

三、オントロギ本体論 *Ontologie* 概念論的な実在、及び所謂実在原理の学、アリストテレス以来、実在の本質、存在の性質やあり方を論じた形而上学の核心をなす、専らスコラ哲学の用語。だがこの種の本体論はカンタベリーのアンセルムやスコートゥスから更にデカルト、ライプニッツにひき

つがれ、殊に十八世紀のドイツ啓蒙時代に入ってウォルフによって現象ということとは違った意味で理性的認識の対象として独自の学に高められ、当時の流行語となったが、カント以来ライプニッツ哲学の通俗化ということから独断論として排される。本体論は第一次大戦後現象学派によって再び取上げられ、今日の実存主義哲学の基をなすに至ったが、ここではスコラ哲学よりの転用に解される。

四、キリスト教に体系的な云々——キリスト教の世界に体系的な教科書といったものが大成したのは、初期スコラの後期で、やはり神聖ローマ帝国が生れてからと考えられる。即ち九世紀になる。

五、こうしたことは云々——この最後の一行は異本（例えば戦後一九四六年に出たペルレンケツテ双書、第三十六冊）では改行とせず。

第一の対話

一、そうお訊ねになるのは——秘密結社のこととてフリー・メーソンは各自会員たることを口外しないことになっていた。即ちかれらの会規の中に決つて、フリー・メーソンであるファルクは何処までもこのことをエルンストに明かさず、辞を構えて極めて婉曲に答えるのみである。そしてもうすっかりそういう云い方にすっかり慣れていると云っているほど、こうした云い廻し方は規約の中に、云わばカテキズムのように決つていたのである。だが後篇冒頭ではファルクはすでに入会した証拠に握手の仕方であることを相手に通じさせている。

二、フリー・メーソンはいつの世にもあった。——フリー・メーソンがなかったときに、どうしてそんなものをつくったのかというエルンストの間に、レッシングはファルクの口を通してこの言葉から、人種、国家、法律を超越した彼の理想とする人道主義の組織としてのフリー・メーソン論が構成されているが、これが彼の云うところのフリー・メーソンの秘密なのである。（後篇参照）

三、動機の多少なんか云々。——レッシングは「文学書翰」第四十九の中で《Nordischer Aufseher》に対し「成程既成宗教は正直に行動しようとするわれわれの動機をふやすこと」を認め、その後で「しかしながらわれわれの行動の場合、単に動機の多いことのみが問題なのだろうか。それよりかむしろその意図の方が遥かに問題なのではないか」と云っている。

四、講師——フリー・メーソンの会長、副会長乃至は会長代理或は二人の監督の下に講師という云わば幹事役があつて、書記、会計以外に式典祭儀、会則その他經典の朗読、解説、説教や講演を行った。普通に講師(Bruder Redner)と云われた。因みにフリー・メーソンは平会員同士

お互いに兄弟と呼ぶが、云うまでもなくキリスト教会や修道院の習慣によったもので、職掌は原則として選挙によっており、無報酬の志願制によることもあったらしい。

五、養育院 スウェーデンのソフィー・アルベルタイネの誕生を記念して一七五三年ストックホルムに設立された養育院。同地のフリー・メーソンのロッジは之を機会に記念メダルをつくった。

六、ドレーズデンのフリー・メーソン——一七七〇—一七七一二年の凶作が機縁となってエルツ・ゲビルケの窮民救済、窮貧児童、孤児の收容のために設立され、一七七二年にはドレーズデン及びフリードリヒシュタットに孤児院を開設、忽ち大発展を見たという。

七、エルンスト！ Ernst なる名は、元来 Ernest で、勇者の意だが、ドイツ語の ernst は英語の earnest にあたり、真面目の意をもつ。

八、ブラウンシュヴァイクのフリー・メーソン——一七七一年カール・ツール・アイントラハト Carl zur Eintracht のフリー・メーソンは年少者に数学、歴史、図画を教えるために一つの施設を設けた。始めは收容人員をわずかに四名に限ったが、数年ならずして十二名に拡げた。ブラウンシュヴァイク公はこれら收容者にわかつべく、銀メダルをつくった。

九、バーゼドー博愛学院——バーゼドー Joh. Bernh. Basedow, (1724~90) ハンブルク出身の教育家で理科論的傾向の科学者、貧窮より身を起してデンマーク王立学習院教官となったが、『万人のための実用哲学』《Praktische Philosophie für alle》(1758) を著し福音正統派から異端とされ、一七六一年アルトナに左遷、ここでレッシングと相知る。ユダヤ教、キリスト教、回教の三教に共通したような理神論的傾向を一層急進化する。次いで当時明君の誉れ高きアンシュタルト・デッソーのフランツの後援を得て、一七七四年ここに彼の理想たる『博愛学院』(Philanthropium) を設立、体育界の先達グーツ・ムーツ Guts Muths と組んで、近代語、自然科学並びに体育を主とするドイツ近代教育の魁をなしたが、性狷介にして容れられず、間もなく指導者地位を去る。理論的にはレッシングに近く、お互いに親しかりそうなものだが、実際にはなかなかそうは行かなかつたようだ。『博愛学院』、『青年の宗教道徳教育論』等の著書は専ら『北歐オブザーヴァ』(Nordischer Aufseher) 紙のクラマー一派の宗教的教育論を代表したもののだが、之にレッシングが批判したのに反撥し、一連の反駁書を發表、更にまた神学者としても『ウォルフエンビュッテル論叢』の編者レッシングに対して挑戦した。続いてまた之に対するレッシングの友人ゼムラーの作と擬せられた『キリスト教に対する新なる危険文書』《Urkunde einer neuen Gefahr für das Christentum》を読んで、この裏にレッシングがあると知ら

み、レッシングに論争の矛を向けたのであった。直接フリー・メーソンとは連絡なかったようだが、オェールスハウゼンの云うように、『博愛学院』はフリー・メーソンが援助したものと、レッシングが考えたものも無理からぬことである。因みに同学院のパトロンのフランツは、ゴータのエルンスト公ともワイマルのアウグスト公とも先輩格に当る。なおゲーテの『詩と真実』第三卷十四参照。

一〇、新聞が云々——『シワーベン・マガジン』《Schwäbisches Magazin》1777, (S. 405) に「ベルリンのロッジのフリー・メーソンは或る講演中、会員一同にバーゼー博愛学院を後援するよう要請した」との報道をのせた。

一一、善業——善行というのは、今日の一般用語で、慈善事業という程の意。スコラ哲学で、ラテン語の *bona opus* の訳語だが、レッシングはここでは多くは「*Taten*」と訳している。神の前に義とされる行い、即ち功德となるような善い行をいう。カトリックでは例えば、断食、修行、市施、巡礼、修道院生活とか十字軍従軍等のようなことまでさす。むろん新教ではこうしたことには否定され、専ら倫理的活動の意味で信仰のしるしとして奨励されているだけのことで、結局は戒律の順守をさすことになるが、ここでは、後出の「義務以上の善行」《*Opus supererogationis*》というのと同じく、宗教的信仰に根ざした慈善事業、今日のいわゆる福祉事業の意と解して差支あるまい。

一二、アド・エクストラ *ad extra*——やはりスコラ哲学の用語で、対外的、表面的な、非本質的なことをいう。従って片手間の、副業のという意味もある。この場合同じく慈善事業をさすことは、容易に察せられよう。

第二の対話

一、質問されても云々。——問われても答えは答えないという意と、問答しながら答は答えないというようにも解される。不詳。だが要するに大意においては大して変りはない。P. Rilla や Oelshausen その他多くは——*sie alle spielen mit Worten, und lassen sich fragen, und antworten, ohne zu antworten* と、*und antworten* の前に *ロンマ* を附すが、マイエル版 (Wirkowsky) その他のように、ここに *ロンマ* を附せざるものも二、三ある。

二、蟻って奴云々——この蟻、並びに蜂の譬喩はボックスベルゲル K. Boxberger によると、ケルススが世の中の秩序を愛情こまやかな蟻の共和国や好戦的な蜂の家庭国家から説明しているのによったものだというが (Bergmann, Hermäre, S. 172) フリー・メーソンに托して、国

家なき国家を示唆したのはレッシングが矯矢ではあるまいか。

ケルスス (Celsus) は二世紀のギリシャの哲学者で、一七八年頃例の『真の言葉』(Yoyas anthes) を著し、文書を以てキリスト教の信仰の根拠なきことを云つてのけた最初の人として知らる。勿論同書は禁断の書として全形を失われているが、オリーゲネスがその反駁書 (Contra Celsum) を書いていたので、わずかにその面影を想像するばかりだったが、十九世紀後半カイクム (Th. Keim) が略々これを復元し、更にグレンクナー (O. Glöckner) によって大体大成された。パスカル、レッシング当時は勿論、古くから問題の書とされていた。キリスト教の影響を受けない古代ギリシャ、ローマの宗教思想はいうに及ばず、キリスト教の草昧の時代、原始キリスト教時代から教父時代の社会思想を知る上にも欠かすことができない。

三、人間だって云々——ヤコービとの対話の中で、レッシングは同じような思想を極めて興味深く語っている。なおこの対話については、ヤコービはエリーゼ・ライマールス宛の手紙（一七八一年三月十五日付）の手紙の中で「レッシングと交した会話の中で、彼は或時市民社会ともやはりまったく揚棄されるに違いないと、夢中になって主張したものであった。そしていかに気狂じみた話のように聞えようが、これは真実です。人間は政府というものが要らなくなってこそ始めてよく治められるのです」云々と云っている。

四、人間の市民社会云々。——ヘルデルは例の人道主義書翰 (Briefe zu Beförderung der Humanität, 2. Sammlung, 26) で『Gespräch über eine unsichtbar-sichtbare Gesellschaft』なる題名の下にレッシングの名を伏して多少の変改はあるが、殆どそのまま引用して、彼の思想を敷衍発展させている。この場合ヘルデンはエルンストとファルクを Er と Ich としているが、更にレッシングの対話の後編に当る同会の歴史などを取扱った『フリー・メーンソン論』『Freimäurer』、『アトラスティア』『Atrastea』V. (Wissenschaften, Ereignisse und Charaktere des vergangenen Jahrhunderts, 8) では Faust と Horst との対話という形で話を展開しているが、この点についてのレッシングとヘルデルの関係については、別稿「レッシングの『エルンストとファルク』をめぐって」に譲ることにしたい。

五、専制政治の粉飾——ヘープラー (Hebler) のレッシング研究によるまでもなく、ここはアリストレースの『政治論』第二章、第二節に「大多数のもの、乃至は全部でなくても少数のものが幸福でなければ、国家全体が幸福だということはありません」によつたものという。(Hebler, Lessing-Studien, S. 188) ——大体この対話篇自体ソークラテースの影響強く、プラトーンの対話篇に学ぶところの多いことは諸家の指摘す

るところである。

六、ユダヤ人——ここはユダヤ教徒と訳した方がわかりいかも知れない。そうするとここにトルコ人というのは、むろんマホメット教徒を代表したものと考えてよからう。ユダヤ教徒、キリスト教徒、マホメット教徒とかいう宗教と民族、国家という相違を超えた人類結合ということが、『賢者ナータン』の場合にはテーマとなっていることは贅言するまでもあるまい。

七、Opus supererogationis——本来自分に課せられた責任乃至義以上の功德とか活動の意。キリスト教の教会用語で、慈善、施業、救貧、その他一般教育施設等の社会福祉事業のようなものを指す。例えばいわゆる聖人と云われているような人の奇特な行状とか、ルカ伝十章、三十三のサマリア人の善行の如し。元来は服従、貞潔、清貧の三つの修業誓願をさすのだが、しまいにはキリストの救済のような不出世の大業までさすようになる。一三四年のクレメンス六世の教書にこの種の奇特な善業を「教会の宝」と称揚したのはいいのだが、クリュニーの改革が度をすぎると、やがては免罪符発行の根拠となり、宗教改革の原因となったことは周知のことである。之を裏返せばキリスト教の教義がようやく人心をつかまなくなった証拠で、新教は勿論、宗教の解体期の所産であるフリー・メイソンのような新興宗教団体がこうした慈善事業に力を入れるようになったのも当然である。

八、見えざる教会——教会の一体を説くカトリックが専ら「可視的教会」(ecclesia visibilis)ということを用い、教会が綺羅を飾るようになったのに対し、信条告白を説くプロテスタントの側では「見えざる教会」(ecclesia invisibilis)を重視する。キリスト教の教義において、キリストは肉化せる神として「神」とは異るとともに「神」と一体なるが如く、キリストの体なる教会は「神の国」の地上に具体化されたものとして、神と一体であるということになる。即ち、元来同一なるものが天にあっては「見えざる教会」、地にあっては「見える教会」ということになるので、キリストの体なる地上の教会は霊なる天国の教会の下にあって、これから罰赦の権を得、信者を支配するということになる。従ってカトリックでも、教会そのものの霊的不可視なことを敢えて否定はせず、ただ「見えざる教会」が「見える教会」以外に別段に存在するとしただけのことだが、プロテスタント側では「真の教会」はキリストの福音に基く真の信仰をもった者たちの組織で、ルターのいわゆる「全キリスト信者の集り」ということになり、カトリックにおけるような外的な制度ではなく、いわゆる「見える教会」などは違つた、より高い「霊の集り」で、ここにこそ「神の言葉」が支配するものと考えたのである。こうして「見えざる教会」は宗教改革の一つの標

語となったのであるが、かれらとて「見える教会」を否定するのではなく、現実にはむしろこの地上の「見える教会」に属しながら天上の「見えざる教会」に参すべき使命をおびて戦ったので（カルヴァン派の云うように神に選ばれたる者たちこそ神の見えざる教会に参じ得たものなのである）ここにいわゆる「斗う教会」（*ecclesia militans*）たる所以があるのである。

元来、教会（*Ekklesia*）というのは、古代ギリシャの都市国家の自由な有権者の市民の集りて、奴隷社会の民主化が進むにつれて国家の支配権を得るようになって、キリスト教の世界にも転用されるようになったもので、この「見えざる教会」の思想は原始キリスト教以来主として下層階級の信者の間に支持を得、次第に支配階級に対するかれらの団結のため、ひいては正統派に対する斗争に或種の精神的武器を与えたものなのであった。これが十二、三世紀の全ヨーロッパを席捲したカタリ派の運動以来、宗教改革時代に再び受けつがれて、三転四転して、ここにフリー・メーンソンの組織にも転用されるに至ったのである。殊に一五五五年のアウグスブルク会議で新旧両派の妥協が成立し、カルヴァン派（改革派）を含めて曲りなりにも信仰の自由が認められ、*cuius religio, eius religio*（各人領主の宗教に服する）の原則の下に、ルター派福音教会を主流とするドイツでは領邦教会（*Landeskirche*）という形で一種の国教化が進められたが、かねがね新旧正統派に快からざる再洗礼、グノーチス派、その他の神秘主義乃至敬虔主義的異端が各地に抵抗運動を試みた。これらの新興宗教は多くは元々カトリックから異端とされたものの復活再生したもので、原始キリスト教以来の伝統に立ち、原始キリスト教時代に遡って地下キリスト教徒（*Krypt-christen*）を以て任じ、かれらの秘密結社にも正統派の教会という言葉を避け、或は「信心講」（*Collegia pietatis*）と称し、或はウィクリフ派と同じく「信者会」（*Conventikel*）と呼び、或は自ら「分派」（*Sekte*）を称し、或は「ユニタス」（*Unitas*）、或は「ソシエタス」（*Societas*）、或は「フマニタス」（*Humanitas*）と云い、更にはまた「教団」（*Orden*）を称するものも現れた。フリー・メーンソンの組織の中には之に倣うものもあったが、結局「ロッジ」という言葉に統一された（後篇参照）。その尤なるものは、ローヤル・ソサイティの前身と云われるハーク（*Theodor Haack*）の「見えざる学院」（*Collegia invisibilia*）であろう。一六四一年イギリス国会が、当時『汎知学』（*Pansophia*）を唱え、『育学大系』（*Didacta magna*）1632）を著して全ヨーロッパに令名を馳せたチェコの人文主義的教育学者コメンスキ（*Jan Amos Komensky*）ラテン名はコメニウス *Comenius*、1592—1670）をロンドンに招聘したのは、ハークの弟子ハートリーブ（*Samuel Hartlib*）の斡旋によるものだが、このときこの両人が胆入りで創設されたのがこの学院なのである。もともとコメンスキはボヘミア兄弟会（*Böhmische Brüder-*

gemeinde, Brüder-unität—原語では Jednotna bratrská, Jednota českých) の司教だったが、カトリック並びにハープスブルク家の弾圧に耐えかね、国外脱出を試みたというのが真相らしい。ボヘミア兄弟団の進歩的な宗教思想はドイツではチェコ亡命者団体 (Exulantengemeinde) に受けつがれたが、就中一七二二年ツインツェンドルフ伯がオーベルラウズイツの所領にたてたヘルンフト教団 (Herrnhuter Brüdergemeinde, Brüderunität) についてはレッシングの『ヘルンフト論』参照。これがゲーテはじめ当時ドイツ文学に与えた影響は見逃すことはできない。

因みにハートリーブはミルトンと親友あり、一六四四年ミルトンは彼に『教育論』(On Education) を献じている。宗教的な教育改革論者で、この「見えざる学院」にはデザグリエ等のフリー・メイソン側の有力者も積極的に参加し、チャールズ二世の允許まで得たものの、中途半端であまり振わず、一六六〇年ローヤル・ソサイティの設立とともにこれに発展的に解消するようになった。とにかくキリスト教の世界において、この種新興宗教団体が草昧期に「学会」まがいの形をとったことは、興味あることである。

ヘルデルがレッシングの驥尾に附して「可視的、不可視的結社」についての対話を発表したことについては前述したが、一七八三年にはゲーテは『ウイルヘルム・マイスター』の大作にとりかかっている。周知のようにこれは教養小説という新しい分野を開拓した野心的な大作だが、初めのうちは実に見事な出来栄なのに仕舞いになるに従い竜頭蛇尾というか、まとまりがつかなくなっているが、おそらくは構想の土台になったフリー・メイソン (ゲーテの場合は特に啓明会^{イルミナチオ}) そのものあまりにも鶴的なユートピア的存在だったため、さすがのゲーテも処理しかねたような節がうかがわれる。また一七九三年にはジャン・パウルがフリー・メイソンを題材に『見えざるロッジ』(Die unsichtbare Loge) を書いているが、これもどうやら成功とは云い難い。(第三の対話の訳注は次号へ)